

柴田真希都著

『明治知識人としての内村鑑三』

——その批判的精神と普遍主義の展開——

(みすず書房・二〇一六年)

大川 真

—

安倍内閣が最重要課題としてきた安全保障関連法案が二〇一五年九月一九日に参議院本会議で可決、成立したのは多くの人にとって記憶に新しいところであろう。もっとも前年七月一日に「安保法制」に関して速やかな法整備を進めることを閣議決定してからは、世上は常に騒がしかった。憲法学者、政治学者をはじめ、かつて無いほど多くの学者や知識人がこの問題で発言した。時にそれは「狂騒曲」のような様相を呈することも屢々見られた。当時、吉野作造記念館の館長であった私は、いろんな人、団体、場でこのことに関して意見を求められた。こうした事情もあって二〇一四年一月に開催した市民講座では「日本の民主主義と吉野作造」というテーマを設定したが、その時に扱った論文の一つが丸山眞男「現代における態度決定」であった。一九六〇年一月一九日に岸内閣は日米安全保障条約・地位協定の調印を行うが、その年の憲法記念日に憲法問題

研究会主催講演会で丸山が話した内容が同論文である。「決断」の持つ意味、「不偏不党」の誤謬、デモクラシーと「不作為」の関係等、丸山政治学を特徴付ける重要なエッセンスが詰まったこの文章には、岸内閣への単純な批判は書かれてない。現政権への支持、不支持の旗幟を鮮明にすることを求める人々にはなぜ私がこの論文を扱うのか残念だがあまり理解されなかった。ここ数年、「知識人と政治」の問題に否応なく向き合わされた私にとっては本書は自身の生き方を省みさせるものとして単なる学術書以上の重さを持っている。先行研究の誤謬や欠陥を鋭く指摘する研究、視座・着眼の独創性に富む研究、資料を博搜し隣接分野を隈無く目配りした研究等は多く挙げることできよう。しかしまっすぐに奇をてらわずに、善き人、善きことを誠実に描いた研究はほとんど無くなってしまった。本書は、広義の「知識人」である私たち自身のあり方を切に考えさせる良著である。

二

本書は二〇一四年に著者が東京大学に提出した同名の博士学位論文を加筆修正したものである。構成は以下の通りである。

序論 近代知識人論の問題意識から見た内村鑑三

第一節 研究の視座——新たな方法的視点からの内村研究に向けて

第二節 導入——思索者・内村鑑三をめぐる基礎的見解

第一章 現状に対する異議申し立て

第一節 批評家としての活動とその影響

第二節 言論統制下の批評の技術

第三節 ドグマの軟化への挑戦

第二章 独立・自由・個

第一節 個人あるいは単独者であることの意義

第二節 反「社会」思想

第三章 亡命者・周縁者・アウトサイダー

第一節 exileの自覚

第二節 異端への価値づけ——正統と異端の媒介者

第四章 世界市民の立場からの告発

第一節 世界市民性への到達

第二節 「愛国者」による「愛国心」批判

第三節 社会改革の論理と倫理

第四節 知識人の仕事としての聖書研究

第五章 反政治的志向の知識人

第一節 抽象的真理の側からの現実主義批判

第二節 共和主義の展開

第三節 非戦論

考察と結論

第一節 近代日本における「普遍主義者

第二節 「特定領野の知識人」かつ「普遍的知識人」とし

て

あとがき

近代日本の代表的キリスト教者である内村鑑三に対しては、汗牛充棟の研究がある。彼が多くの論者を惹きつける要因として、信仰の深さが挙げられる。たとえば森有正は、「普通は、自分の信じてゐるキリスト教から神を考へるのに、かれは、神から、キリスト教を吟味し、検討してゐるのである。これは凡俗の到底なしえないところであると言はなければならぬ」(『内村鑑三』弘文堂、一九五三年)と、短いがまことに的を射た表現で信仰の特徴を記述している。正宗白鳥、政治家、関根正雄、中沢治樹、鈴木範久、小原信、土肥昭夫らの優れた研究も主として信仰面に着目している。また不敬事件、足尾銅山鉍毒問題の告発、日露戦争期における非戦論の提唱等、国家や権力に一步も退くことなく正対した社会思想家として世に知られ、半澤孝磨氏が「内村の影響力の特徴は、それが単にキリスト教界内にとどまらない、と言うよりはその外において巨大なことである」(『近代日本のカトリシズム』みすず書房、一九九三年)と述べた通り、内村に直接師事した森戸辰男、鶴見祐輔、南原繁、矢内原忠雄、高木八尺、田中耕太郎、大塚久雄らの東大関係者、堺利彦らの社会主義者、有島武郎、志賀直哉などの白樺派の作家だけにとどまらず、著述を通じて多くの若者たちの心を掴んでいった。ただし従来の研究において、信仰者と社会思想家という内村の二つの貌を、双方ともに的確に捉えることに成功し

た研究はほとんど無い。信仰者の面に重きを置けば、彼の社会批評は宗教思想の軽さを意味し、また社会思想家の面に本質を見れば、信仰者としての告白は実践運動から遠ざかった後退のように思われてしまう。柴田氏は、こうした「信」と「知」の両面を統合する視点として、内村を「知識人」として措定することを提唱する。ここで氏が念頭に置いているのはE・W・サイードやJ・バンダの知識人論である。公平で徹底した批判精神を発揮して、エグザイルやアウトサイダーの立場から権力に真実を語った内村の姿はまさにサイードが提起した知識人像にふさわしい。また氏は、内村がバンダと同じくドレフュス事件におけるゾラの言動に共鳴し、権力に加担する知識人たちの欺瞞（「知識人の裏切り」）を暴き、正義のために戦いつづけた両者の思想的類似を、帰納的に見出している。欧米での理論的な枠組みを横滑りに導入しそれを以て自身の研究の眼目とする論文や著作がよく見受けらるが、本書はそれらの浅薄な研究とは全く異なる。こうした「知識人」内村の胸中に一貫して存在していたのは、humanity と divinity という二つの軸であった。この二つの価値基準は車の両輪のような協働関係にあるだけではなく、緊張関係を常にはらんでいる。前者を基準にした世俗世界における自由や独立の追求、後者を基準にした信仰世界における真理への忠誠。氏は、この二軸による思想的営為によって、振れ幅のある内村の諸言説を整合的に理解しようと努めている。

本書の方法論・視座を簡単にまとめてみたが、各論においても本書は新たな知見を提供している。第一に、内村の社会主義への共鳴について。従来の研究では、一九〇七年頃から内村は社会主義と決別するとされていたが、氏は、内村が決別するのはあくまで当時の日本で主流であった無政府社会主義、急進社会主義であって、安部磯雄や賀川豊彦らのキリスト教社会主義を支持し、そしてとりわけロバート・オウエンに親近感を持ち、「真正の社会主義」を内村なりに模索していたと指摘している。福田英子の拒絶事件以降、社会主義陣営からの批難が続くようになるにも関わらず、内村はなぜ社会主義へシンパシーを感じ続けたのか。それは初代教会に見られた原始共産社会のあり方と穏健的な社会改良主義との共通性を見いだしたからと氏は説明する。第二に愛国心について。「二つのJ」への信奉を表明したことから、内村には愛国者、さらにナショナリストのイメージがつきまとっている。氏は、内村が「世界人」ないし「世界の市民」としての自己規定を強く持っており、彼の愛国心とは、世界のなかの善き国、善き市民となるべく日本および日本人を教導しようとした普遍的立場にのっとるものであったと述べる。したがって没我的に国家を礼賛してシヨージズムをまき散らす当時の日本の愛国主義に対しては、内村は自身の信ずる愛国心に基つき厳しい批判を展開していくことになるのである。第三に内村の政治思想について。従来の研究では、彼の国家権力に対する抵抗や非戦論などは対象とされてきたが、

内村がどのような政治体制を理想視していたのかその具体像は明らかにされてこなかった。氏は、精神面のみならず制度面からも内村が共和制を熱心に支持していたことに注目する。共和制は、人々に独立や自由の気風を養う（この点、福澤諭吉の言説との異同が私には気になった）。ドレフュス事件に関し、ゾラのような知識人のみならず、多くの国民が批難したのは、そのフランスが共和政体であったからと内村は考えた。共和制を支持したことは、臣民意識の相対化、天皇制国体への批判へと結びつく。第四に義戦論から非戦論への展開について。内村の思想における変節や転向として論争の焦点となってきた問題である。日清戦争を是認した当時の内村は「米國理学士」「農学士」という矜持を持っていた。彼は自然法則の普遍性を専門家からの狭い立場から過信し、「新」にして「小」なる日本が「旧」にして「大」なる中国に打ち勝つのは当然だと考えた。こうした内村の姿はまさにバンダが提起した「裏切りの知識人」の系に属すると氏は述べる。以後の内村は、「裏切りの知識人」としての自身の在り方を恥じ、脱却を図ることになるが、その際に大きな転機となったのが中国観の転換であると氏は指摘する。内村は朝鮮と同様に中国の人民に対しても国政を担う能力を認め、日本は適度な距離を保ちながら、中国の自主自立を尊重すべきだと主張した。以後の内村は、正義や公正、自由と同様な重みを持った価値として非戦を *humanity* の基準に組み込んでいくことになる。

三

以上、本書の概要や研究史上で意義のある点を幾つか述べてきた。最後に私からの注文を述べて擲筆したい。本書は内村を明治期の言論形成で大きな影響を持った知識人として描いたものであり、その際に、E・W・サイードやJ・バンダの知識人論を参照している。しかしE・W・サイードとJ・バンダの論だけを参照するのは私には違和感があった。サイードも言及しているように、知識人を論ずるならば、A・グラムシの議論も参照すべきではないだろうか。グラムシは、バンダの言う知識人像、すなわち聖職者に代表されるように上部構造を継続して独占する知識人像では、当時の新しい知識人像は把握できなくなつたと考え、「有機的知識人」という在り方を提唱した。社会を構成する諸集団と有機的関係を持ち、教育、指導によって人々からの同意を調達し、市民社会と政治社会とのそれぞれに重層的、複層的なヘゲモニーの創出と普及を行う「専門家」であり「技術者」である。また市民社会を形成する様々なアソシエーションは政治社会と緊張関係にあるだけでなく、有機的知識人の登場によって、政治社会の制度、機構を吸収することによって、自律的な市民社会を再構築し、政治社会の後継たる役割を将来的に担うようになるとグラムシは述べる。こうした有機的知識人として明治大正期の思想界に登場するのが、穏健な社会改造を目指すキリスト教者である安部磯雄、吉野作造、

問題へと繋がるものとして考えるべきであろう。

(中央大学准教授)

賀川豊彦らであると私は考えている。彼らは内村から一定の評価を得ているが、内村とはその言動を大きく異にした。安部らの言説には内村の著述に見られるようなヘブライズムの深重は見られない。代わりに社会思想や社会実践において見るべきものがある。すなわち内村と同様に民衆を神聖視しないが、内村とは異なり、民意を重視し政治参画を促す姿勢がある。後の日本労働総同盟となる友愛会、家庭購買組合や江東消費組合、日本で最初の庶民対象の産科医院を作った賛育会、言論の自由を守るために結成された黎明会など、様々なアソシエーションの設立と運営に積極的に携わっている。また関東大震災後では、二十三日会による政策提言、罹災者への住宅供給を目的に内務省によって設立した財団法人同潤会との協働等、吉野らのアソシエーションが政府、特に内務省との緊密な協力態勢のもとで行った事業の功績は多大なものがある。さらに政党について。内村は重視しなかったが、安部らはいずれも無産政党の発足に関与している。直接的な暴力行動をとらずに、政府への対抗のために政党を足がかりして民意を獲得しようとする戦略はまさにグラムシの言う「陣地戦」である。内村は以上の点において「有機的知識人」では無かったといえるが、田中正造らの徳澤もあったにも関わらず、なぜ彼は「有機的知識人」のコースと決別したのか。この問題は内村における社会実践の後退と信仰の深化といったような簡単な決めつけをすべきではなく、日本における社会民主主義の未成熟、市民社会の挫折という大きな